

三中だより

令和3年度 9月号

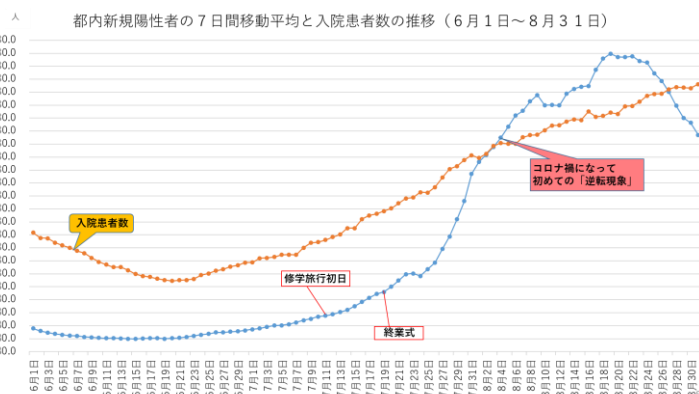
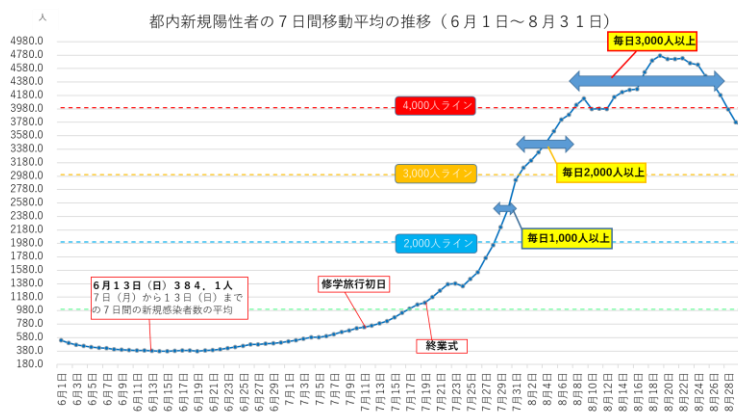
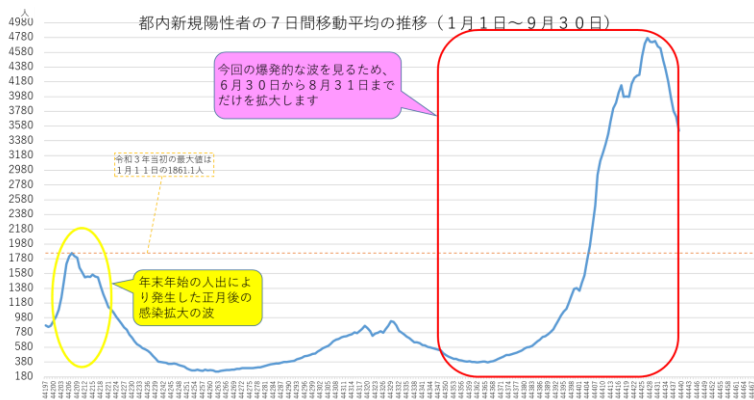


令和3年9月11日発行
荒川区立第三中学校
(学校通信 No. 8)
校長 小柴 憲一

全校朝礼の話より

(都内新規陽性者の7日間移動平均の推移から、「今、改めて感染防止対策に対して気を引き締めることの重要性」を考える)

7月下旬からの新型コロナウイルス感染拡大は急激で、残念な亡くなり方をされた方々も多く報じられました。そこで、子どもたちには社会を構成する一員として、分析的・客観的に物事を見つめることと、そのうえで自分がしなければならないことを考える習慣を付けてもらいたく、以下のような話をしました。



おはようございます。校長の小柴です。今日は、「今、改めて感染防止対策について気を引き締める」ことについてお話します。

このグラフは、今年の1月1日から9月30日までの、東京都の新規感染者数をグラフにまとめているものです。一番左側に小さな山があって、黄色の丸で囲われている箇所が、昨年末から年始にかけて人出が増えた結果の感染拡大の波です。それに対して、右側は正月後の山を遥かに超えて急上昇していますが、それが現在の山です。このグラフだけでは、今の状況がよく分からないので、赤く囲った箇所、6月1日から8月31日までを拡大します。拡大すると、横に広がるので、急上昇などの角度は、ここで覚えておいてください。

少し緩やかに見えるようになったと思いますが、ここで一つ説明をしておきます。このグラフは、東京都福祉保健局が毎日公表する7日間移動平均の数値をグラフ化したもので、7日間移動平均とは、左側の赤い枠で囲ったところに書いてありますが、例えば6月13日の日であれば、6月7日から13日までの7日間の平均値を点にしているということです。そうすることにより、曜日による検査数に影響されて多い曜日や少ない曜日があるということに左右されることなく、なめらかなグラフになっています。横に何本かのラインがありますが、赤いラインが4千人のライン、以下黄色が3千人、青が2千人となっています。目安として、修学旅行に出発した日、終業式の日の位置はここです。先ほどからこのグラフを見ていて、「ピークは過ぎたから大丈夫なのかな?」と思っている人がいるかもしれませんが、今、直面している大きな問題点について説明します。

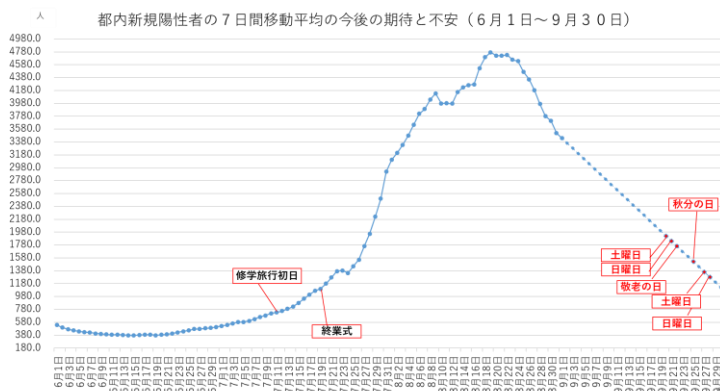
確かに、頭打ちになっているのかなとは思いますが、両端に矢印がついている青い区間は、毎日、1千人以上だったり、二千人以上だったり、三千人以上という、過去に例を見ない人数の方々が、日々感染していたのです。いったい、誰に、どのように診察を受けたり、治療を受けたりしたのでしょうか。普通の風邪のように2~3日で治るものではありません。最低2週間かかるはずですが、つまり、患者さんは増える一方になっているということです。

この赤い線は入院患者数です。退院する人もいますが、それ以上に入院する患者さんが多いためどんどん増加しましたが、それ以上に新規感染者となる方が多いので、途中で逆転現象が起きています。入院患者数よりも新規感染者数の方が多いというのは、昨年からの初めてのことで。皆さんも、ニュースなどで見たり聞いたりしたと思いますが、救急車を要請して病院に搬送しなければならぬのに搬送先が見つからなかったり、自宅療養せざるを得なくなり、その後、自宅で容態が急変して亡くなったりなど、残念なことが報告されています。

東京都新型コロナウイルス感染症 モニタリング会議における専門家の発言

8月26日(木)の会議において
東京都医師会副会長 猪口正孝氏がこう発言しました。
「救える命が救えない事態がさらに悪化する」

東京都医師会が、「すでに、救える命が救えない事態になっている」ということを認めた発言で、「危機的状況」とか「逼迫した状況」とは全くレベルの違う発言です。



私たちの感染防止対策、「当たり前」を 改めて見直す 1

- 必ず、毎日、検温しましょう。
- 余裕をもって登校し、きちんとした手洗いをしてから教室に入り、活動の合間には手洗いをしましょう。また、何かを触った手で友だちに触れたり、自分の顔などを触らないようにしましょう。
- 休み時間などは友だちとの距離をとって会話をしましょう。
- 必要以上に大きな声は出さないようにしましょう。
- 配膳が始まった必要のないことは話さず、マスクを取ったら一言もしゃべらないようにしましょう。何か必要なことがあったら、手を上げて合図をしましょう。

私たちの感染防止対策、「当たり前」を 改めて見直す 2

- 家族内で感染者が確認された場合は、登校しません。
- 自分自身や家族に発熱症状がある場合などは、登校を控えて下さい。
⇒なぜなら、万が一、その後、感染が確認された場合、校内で接触した人の多くが濃厚接触者となったり、実際に感染したりすることが考えられるからです。
そのときつらい思いをする人は、感染してしまった人だけでなく、むしろ、感染させてしまった人、つまり登校してしまった人の方かもしれません。

まもなく3連休などがあります。
保護者の皆様も当たり前のことしかできないと思いますが、改めて気を引き締め直して、さらなる徹底を図っていただきたく存じます。

東京都では、専門家を集めて、定期的にモニタリング会議を行っています。8月26日の会議で、東京都医師会副会長の猪口正孝氏が「救える命が救えない事態がさらに悪化する」と発言されました。皆さん、このご発言の意味、どうということなのか、よく考えてください。裏を返すと、「すでに、救える命が救えない事態になっている」ということを東京都医師会が主張したということです。これまでの「危機的状況」とか「逼迫した状況」とは全くレベルの違う発言だということです。明日から、新規感染者がゼロになるということはありません。私たちの中にも感染してしまう人が出ることも十分に考えられます。しかし、一人でも多く、救える命が救えるようになるため、私たち都民はみんなで新規感染者を減らす努力をしていかなければならないということです。

7日間の平均で、今後70人ずつ減っていったとして、9月はこんな下降線になります。これだけでも、医療体制は、少しは楽になるのではないかと思います。しかし、月末には敬老の日と春分の日を含めて、休日が続く期間があります。このときに、人出が増加すると、再び増加に転じてしまいます。また、「学校が始まると感染者が増えるのではないか」という報道もされています。

そこで、学校に目を向けてみます。
1学期終わりから始めた、生徒会本部企画の昼休みの校庭開放は、その時間帯の当該学年の廊下の密度が格段に減っていて、会長が言っていたように確かに効果があるなど思いました。また、皆さんがよく触るような、ドアノブや手すりなどは光触媒といって、用務主事さんが特殊なコーティングをしているので、細菌などが除去されるようになっています。また、皆さん気付いているように、昨年度のように、教室の扉を撤去して換気の効果を高めました。

しかし、問題点もあります。
遅刻ぎりぎりまで登校して、きちんとした手洗いをせずに教室に入っている人がいます。朝の検温をせずに、適当に数値を書いている人がいます。「ワンアーム」とか言っていますが、かなり近い距離で長い時間会話をしている人たちがいます。場の広さにそぐわない、大きな声を出している人がいます。給食の配膳が始まっているのに、不必要な会話を続けている人がいます。活動の合間の必要な手洗いをしていない人がいます。

私たちにできることは限られていて、もう「当たり前」となっていますが、それを徹底することが家庭でも学校でできることです。

必ず、毎日、検温しましょう。余裕をもって登校し、きちんとした手洗いをしてから教室に入り、活動の合間には手洗いをしましょう。また、何かを触った手で友だちに触れたり、自分の顔などを触ったりしないようにしましょう。休み時間などは友だちとの距離をとって会話をしましょう。必要以上に大きな声は出さないようにしましょう。配膳が始まった必要のないことは話さず、マスクを取ったら一言もしゃべらないようにしましょう。何か必要なことがあったら、手を上げて合図をしましょう。

また、家族内で感染者が確認された場合は、登校しません。自分自身や家族に発熱症状がある場合などは、登校を控えてもらいたいと思います。なぜなら、万が一、その後、感染が確認された場合、校内で接触した人の多くが濃厚接触者となったり、実際に感染したりすることが考えられるからです。そのときつらい思いをする人は、感染してしまった人だけでなく、むしろ、感染させてしまった人、つまり登校してしまった人の方かもしれません。

新型コロナウイルス感染症との闘いやつきあいはいつまで続くか分かりません。しかし、医療がついて行けずにかげがえのない命を亡くしてしまう事実があります。そして、誰もが感染する可能性のある感染症です。

だからこそ、一人一人ができることを丁寧やり、我慢すべきことを我慢していかなければならないのではないかと思います。

正解は分かりません。しかし、それが最適な解、いわゆる最適解ではないでしょうか。

長くなりましたが、私からは以上です。

東京パラリンピック大会から考えさせられたこと(共生社会の実現のために)

私たちに、多くの勇気・感動・驚きなどを与えてくれた、東京パラリンピックが9月5日(日)に閉会しました。

ひとくくりに障がいといっても、生まれたときから障害があった選手と、突然の事故などにより負った障がいを受け入れて生きていくことになった選手とでは、ここまでの道のりは異なったことでしょう。また、視覚に障がいがある選手・体を動かすことに障がいがある選手・知的障がいのある選手の、それぞれの障がいの程度によっても日々の生活感は全く異なるのではないかと思います。さらに、進行性の難病による障がいの場合、時間の経過とともに障がいの状況も重くなっていくため、できていたことが困難になっていくことについて身体的・精神的な負担を背負うため、日々の自分自身との闘いが生活の一部になっているのではないかと思います。

そこでパラリンピックでは、一つの競技でも、障がいの種別や程度ごとにクラス分けなどをして選手たちはその中で競い合っていました。

私は、いくつもの競技を見ましたが、次の2つについて考えさせられました。

1 「ハイポインター」「ローポインター」という用語が普通に使用されている

団体競技の中に、チーム内で障がいの程度が比較的軽い選手が「ハイポインター」、逆に重い選手が「ローポインター」と区別している競技がありました。その競技では、障がいの程度ごとに選手にポイントがついており、障がいの程度が軽くなるほどポイントが大きい数字になり、出場選手の合計ポイントを定められえたポイント以下にしなければならないというルールがあります。ですから、障がいの程度が軽い選手ばかりを出場させることができないのです。

そこで、障害の程度が軽い「ハイポインター」は機敏に動きポイントを多くとったり、ポイントをとった後もすぐに守りについたりしていました。一方、障害の程度が重い「ローポインター」は仲間の「ハイポインター」が攻めやすくするために走路を確保したり、相手の「ハイポインター」が攻撃しにくくなるような場所に移動したりしていました。

一瞬、「ハイポインター」「ローポインター」と聞くと、「高い」「低い」と差をつけているようにとらえてしまいがちですが、チームの中では、それぞれの選手が自分の役割を受け止めており、それらの「ハイポインター」「ローポインター」という用語に対して抵抗感を感じている様子は全く感じられませんでした。

しかし、私たちの日常生活で、もし障がいのある方と身近な関係で生活をするようになった場合、障がいのある方に「あなたはこの役割をお願いします」とはなかなか言いにくいことだと思いますし、一つ間違えると重大な差別的な発言になってしまいます。

パラリンピックに出場しているチームが、「ハイポインター」「ローポインター」を自然に受け入れているのは、「チームとしての目標があること」「すべての選手がそれらを共有していること」「一人一人が目標を達成するための自分の課題を認識していること」の3点があるからだと考えました。

私たちの生活に当てはめた場合も同じではないでしょうか。「組織としての目標があること」「組織を構成するみんながそれを目標とすること」、そして「自分が目標を達成するために組織に貢献できることはこれだ」という認識があること」の3点を柱に組織づくりをしていくことが重要であり、「共生社会」をつくっていくのなら、社会すべてにその考え方がなければ実現は困難だということにたどりつきました。

2 知的障がいある選手が出場する競技にはクラス分けがない

同じ知的障がいでも、選手それぞれには知的機能の困難さが異なります。また、ADHDや自閉症などの発達障がいや、抑うつや双極性障がい、不安障がいなどの精神疾患を併発している選手もいたようです。

ですから、ある選手がフライングをして棄権になったときに、他の選手の中で突然落ち着き

がなくなってしまう、ある同じ行動を何回もしながらようやくスタート位置につく場面や、1日のレースのスケジュールが予定通り進行しなくなってパニックになった選手がいたなどのことがありました。選手一人一人が感じる困難さが異なるのに、「知的障がいのある選手のクラス」として一律に競技をすることに抵抗を感じましたが、あまりにも一人一人の選手の特徴が多すぎてクラス分けすること自体が困難だからそうしているのではないかと考えてみました。

私たちの通常の生活では、知的障がいのある方だけではなく、ADHDや自閉症などの発達障がいや、抑うつや双極性障がい、不安障がいなどの精神疾患のある方とはかなりの高い頻度で接しているはずですが、しかし、見ただけ、少し話しただけでは気付けない場合が多いことと、それらの障がいや疾患による特徴が表れるのは本人にとってはきっかけがあっても、周囲にとっては予期しないときが多いため、実は本人がとても混乱している、強い不安感に陥っているなどのように理解しにくいということがあります。また、特徴の表れ方が、周囲にとっては攻撃的な言動と受け止められてしまう場合は、本人は困り果てたうえで出てしまう言動だとしても、周囲の人を脅かすことになってしまうだけではなく、逆に攻撃し返されてしまう場合もあります。障がいや疾患の理解ができていない「子ども」の場合は、後者のように攻撃し返してしまうことがどうしてもでてきてしまいます。

そのような点から考えると、「共生社会」をつくっていくためには、私たちは知的障がいだけではなく、様々な発達障害や精神疾患などについて知識を習得するとともに、それらの方々が「今どのようなことで困っているのか」「どのようにすれば困らないようになるのか」というように、積極的に理解しようとしていく必要があり、社会すべてにその考え方がなければ「共生社会」の実現は困難だということにたどりつきました。

今回「障がいのある方との共生社会」について考える機会となりましたが、今では「共生社会」といえば、人種・国籍・言語・文化・性・年齢など様々な違いのある人々が、すべて分け隔てなく暮らしていくことのできる社会を意味するようになっていきます。しかし、今回たどりついた考え方の2点は、いずれも、それらの共生社会の構築にも共通することであり、必須のことです。

閉会式で、2017年から、インクルーシブな世界の実現のために全世界で力を入れてきた「I'm POSSIBLE」の表彰において、「LEARN ENGAGE INCLUDE(学ぶ・取り組む・誰もが一緒に)」のキーワードが紹介されたとき、私の考え方の妥当性を感じました。

これからの多様性と調和が尊重される時代を生きていく子どもたちには、その考え方に基づき、「共生社会を実現してほしい」と校長として強く思いました。

きせきさい 輝夕祭(舞台の部)の保護者配信計画

本校では輝夕祭という名称で馴染んでいる、いわゆる文化祭の舞台の部を、10月23日(土)に実施する予定で計画を立てています。ただし感染防止策として、鑑賞する子どもたちは、すべて自分の教室で体育館からのライブ配信もしくは録画配信を見る手段を執ることで検討中です。つきましては、同じURLを保護者の皆様にも事前にお知らせし、ご自宅でも鑑賞できるようにしてまいりたいと思います。URLが2つになるなどの煩雑な面が出てくるかもしれませんが、詳細は、近くなりましたらお知らせいたします。

お知らせ

- 第61回東京都中学校吹奏楽コンクールで、本校吹奏楽部が以下の成績を収めました。
B組 銀賞
- 第7回足立中学校陸上競技選手権大会で以下の成績を収めました。
男子共通400m 第2位(1分00秒70) 山田 陽(2年)